

## 時間かせぎの資本主義

宮本憲一先生とゼミ卒業生らで毎月、現代資本主義に関する文献を読んでいる。大学院時代に戻ったように、先生の隣に座って報告に耳を傾け、積極的に発言している。写真の関連文献\*を紹介したい。

表紙カバー裏から一資本主義は自らの危機を「時間かせぎ」によって先送りしてきた。70年代、高度成長の終わりとともに、成長を前提とした完全雇用と賃上げは危機を迎えていた。そこで各国はインフレによる時間かせぎ、つまり名目成長に実質成長を肩代わりさせて当面の危機を先送りした。80年代、新自由主義が本格的に始動する。各国は規制緩和と民営化に乗り出した。国の負担は減り、資本の収益は上がる。双方にとって好都合だった。だがそれは巨額の債務となって戻ってきた。債務解消のために増税や緊縮を行えば、景気後退につながりかねない。危機はリーマン・ショックでひとつの頂点を迎えた。いま世界は、銀行危機、国家債務危機、実体経済危機という三重の危機の渦中にある。新たな時間かせぎの鍵を握るのは中央銀行だ。その影響をもっとも蒙ったのがユーロ圏である。ギリシャ危機で表面化したユーロ危機は、各国の格差を危険なまでに際立たせ、政治対立を呼び起こした。EUは、いま最大の危機を迎えている。資本主義は危機の先送りの過程で、民主主義を解体していった。危機はいつまで先送りできるのか。民主主義が資本主義をコントロールすることは可能か。ヨーロッパとアメリカで大きな反響を呼び起こした、現代資本主義論。

序章から一後期資本主義の破綻や自己破壊などまったく眼中になかった人々でも、1970年代の後期資本主義の危機には気づかないわけにはいかなかった。彼らもまた危機理論が程度の差こそあれ的確に診断していた緊張関係を感じとり、それに反応した。今から振り返ると、この反応は中期的に見れば一といってもすでに40年以上経っているが一成功を収めたように見える。その反応とは貨幣の助けを借りた時間かせぎだった。ここでいう「時間かせぎ」とは英語の buying time(時間を買う)という表現の直訳だ。それは目前の出来事を先延ばしにして、そのあいだになんとか解決を図ることをいう。その手段は必ずしも貨幣とは限らないが、これから見ていくケースでは貨幣が投じられた。それも巨額の貨幣が。近代資本主義の制度の中でも、もっとも神秘に満ちた制度である貨幣。その力を利用して、潜在的な不安定化要因である社会紛争を緩和しようとしたのだ。最初はインフレを通じて、次には国家の債務を通じて、さらには民間信用市場の拡大を通じて、そして最後は、今日のように、中央銀行による国家と銀行の債務買い取りを通じて。それは戦後の民主主義的資本主義の危機を、時間を買うことによって先送りし、引き延ばすための方策だった。これから見ていくように、この方策は資本主義の発展の中でも画期的な過程、すなわち「金融化」と呼ばれる過程と密接に関連していた。 \*ヴォルフガング・シュトレック著、みすず書房、2016年



(2019年6月15日)